はじめに

「すでに鋤に手をかけたがゆえに」

あの大震災から三年半、『新生の明日を求めて』のパート 1 としての第一部、第二部を出してから約二年、このたびようやく第三部に資料を加えた合本を皆様にお届けすることになりました。新生計画実施要領作成委員会では、多くの小教区、七つの地区評議会、教区の諸委員会からの意見をうかがいつつ、毎月二、三回の会合を重ねてこの文書を準備してまいりました。

世間では震災の記憶が遠ざかりつつあるように感じますが、震災の痛みを忘れてはならないと思います。震災は大きな痛みでした。その痛みを受け止めながら、また、「谷間」に置かれた人々の心を生きることが出来るように努めながらこの三年半の日々を過ごしてきました。たとえ五年経とうと、十年が過ぎようと、私たちは語り部としてこの震災の体験を語り継いでいく役目があると考えています。

この第三部は、第一部と第二部が目指した刷新の具体化を図る改革案です。後でも触れますが、刷新は改革につながるものです。まず「あの山に登ろう」と決め、次いで実際に準備し登り始めるという関係が刷新と改革のつながりです。ですからこの第三部は、第一部および第二部とワンセットで読み、理解する必要があります。この第三部では、さまざまな具体的な提案が出されます。それらを単に、組織いじりとしてしまってはなりません。多くの提案の中には、ある人にとっては納得できても、別の人にはピンと来ないというものもあるでしょう。もしここに出ている案よりも第一部・第二部の方向性を実現するにふさわしい方策があれば、そちらを採用して構わないのです。周知を集めて五つの教会像を実現し、「新しい福音宣教」に向かうのです。また、第三部の諸提案を実施していくためには、皆で分かち合いを積み重ねていくこと、現状分析と目的に添った対応を識別することが欠かせません。そうしたプロセスを通して、それぞれの地区・ブロック・小教区での新生を具体化していただくことをお願いします。

1. 第一部と第二部が提示した刷新の方向

阪神淡路大震災を体験した私たちは第二バチカン公会議以来の教会刷新をさらに一歩進めていく選択をしました。地震の直後に出された「新生基本方針」を覚えておられるでしょうか。

新生基本方針

1　大阪教区が目指す阪神淡路大震災からの「再建」計画は、単に地震以前の状態に復旧することではない。キリストの十字架と復活（過越の秘義）の新しい生命に与る「新生」への計画である。

2　これは、被災地、しかもその中で特に「谷間」に置かれた人たちの心を生きる教会を目指すことを意味する。

3　ここでいう教会には、小教区、修道院、諸事業体をも含む。

4　神戸地区のみならず、大阪教区全体を組み込んだ新生への体制をつくることで、他地区も同じ姿勢を持つようになることを目指す。

5　具体化に際しては、全てが痛みを伴うプログラムであることとする。

第一部では、この方針を即座に発表し、緊急支援体制をスタートさせるとともに、司教館の売却をはじめとする対策に取り組んだ教区の決断の背後に、カトリック教会の歴史があったことを簡潔に説明しています。この「新生計画」には、第二バチカン公会議から始まり、アジアでの司教会議の発足（FABC:アジア司教協議会連盟）による広がり、「日本の教会の基本方針と優先課題」の策定と二度に亘る福音宣教推進全国会議（NICE）の開催によって進められてきた教会刷新の歩みがあります。

ここで、第二バチカン公会議の目指した教会の新しい姿の特徴を新カトリック大事典の説明（ネメシェギ師担当）で確かめてみましょう。

(1) キリスト中心、イエスの死と復活という救いの秘義は、宣教、教理、典礼、霊性、教育等のあらゆる営みの真髄であり、中心である。
(2) 聖書中心、信者の一人ひとりが、自ら、直接、聖書を読み、学び、その教えを生活の場で実行するように努める。
(3) 典礼の重視。典礼は神の民全体が、積極的に行う礼拝であり、教会の活動の頂点である。
(4) 神の民としての教会。信者は皆、キリストの預言職、祭司職、「王職にあずかる「神の子ら」であり、教会の諸活動の主体である。
(5) 司教団の団体性の協調。
(6) 各地域の教会の独自性。各文化独自の価値の尊重。教会の理想は、画一性ではなく、多様性の価値を認める統合にある。
(7) 教会外の人々への関心。
(8) 貧しい人々、虐げられている人々との連帯、教会は、権力者の側にくみせず、「小さい人々」の代弁者になる。
(9) 信教の自由の確認。
(10) 絶え間ない刷新をうたう将来志向の姿勢。教会は現状を肯定せず、キリストの福音に従って、また、現代人、特にカトリック以外のキリスト者の正当な要求を考慮し、自らを常に刷新しようとする。

こうした公会議の刷新を求める姿勢、現代への生きたキリストの証しに生きる福音宣教に向かう方向性は私たちの目標となっています。『教会憲章』が、「教会はキリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり道具である」（1 項）と述べているように、新生計画においては、教会がしるしであり道具となるための鍵を「交わりと証し」に見出しています。この小冊子の副題である「交わり証しする教会は、こうした教会間の現れであり、私たちの目標の表明です。

また、アジアの教会としても FABC を通して、アジアの地で福音宣教に向かう道として、「キリストの弟子として生きる」ことが打ち出されています。1990 年と 95 年の総会の最終声明には、刷新のあり方と改革への提言が述べられ、深い霊性を培うことへの招きとともに、具体的な取り組みが示されています。インカルチュレーション（福音の文化的受肉）は、より深くキリストと交わることなしには実現しないことから、信仰の原点に立脚した福音宣教の次の一歩が求められているようです。

日本の教会が取り組んできた NICE(福音宣教推進全国会議)の動きも、刷新から改革に向かう歩みでした。ただ、刷新の方向性が打ち出されても、それを実現してゆく改革への力量が増していかなければ、停滞の淵に沈んでしまいかねません。

2. 新生の目標である「新しい福音宣教」

そもそも新生への歩みは平坦であるはずがありません。イエスの死と復活の過越の秘義にあずかるのですから、その歩みはある種の死を超えて行かねばならない回心の歩みです。具体的な改革とはそうした痛みを伴う作業です。しかし、その目的は教会のあり方を質的に変えていく「新しい福音宣教」に生きる 21 世紀の教会づくりにあります。

「新しい福音宣教」という言葉は、ヨハネ・パウロ 2 世が教皇になられて以来、しばしば回勅や使徒的勧告において使われてきたものです。現代世界に福音を告げ知らせるには、「熱意において新しく、方法において新しく、表現において新しい福音宣教」が必要であると力説されています(1983 年、ハイチでの説教)。

エマオに下って行こうとしていた弟子たちに現れたイエスが「こういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」と諭されて、弟子たちの心を燃やしてくださったように、さまざまな面で困難な状況にある教会の宣教活動を再構築しようとするのがこの「新しい福音宣教」です。

新生計画は、いわば大阪教区版の「新しい福音宣教」です。御父のみ旨に従って、聖霊の導きを受けながら、キリストの弟子として21世紀の日本における福音宣教に取り組むのです。その過程では、迷いや失敗もあるかもしれません。だからこそ、5 つの教会像において、今後の教会ビジョンを提示したのです。「協働」や「共同責任」といったあり方を強調し、「(聖霊による)識別」という道しるべを明記しました。目標は福音に従って「谷間に置かれた人々の心を生きる」ことであり、そのために「交わり」を具体的に生きて「証し」することを使命として受け止めます。

司教も司祭も、修道者、信徒も、それぞれがその固有の召命を新しい福音宣教」に向かう中で再発見する必要があります(ヨハネ・パウロ 2 世の使徒的勧告『信徒の召命と使命』『現代の司祭養成』『奉献生活』参照)。新生ビジョンでは、世俗の中で生きている信徒を教会の前面に据えています。これは NICE-1 で問題提起された「教会と社会の遊離」の克服につながるものです。

もう一つの課題であった「信仰と生活の遊離」は、生活レベルでの「分かち合い」を通して徐々に埋められていくものと考えています。新生計画の実現は、遊離克服の歩みにつながってゆくものです。もちろん、「新しい福音宣教」の柱には、みことば、典礼、祈りがあり、それらこそ私たちに気付き、促し、力を与えてくれる原動力となるものです。

しかし、刷新を目指す教会がその目標を具体的に実行するために「改革」に取り組むとき、さまざまな、そして多くの困難に出会うことになります。目標としての「新しい福音宣教」へのさまざまな取り組みを継続していくとともに、第一部にある「現実～信仰～共同体」のトライアングルのうちに希望をもって進んで行くことが欠かせません。現実に立脚していること、より深い信仰に生きること、真の交わりに生きる共同体であること、これらの三点がそろってこそ、地に足のついた信仰を生きることができるのでしょう。このトライアングルの一角が崩れると、「新しい福音宣教」はむなしい掛け声に終わってし

まうからです。【▸資料 1】

以上が第三部を提案するにあたって考えた主なポイントです。地区・ブロック、小教区、教区の各レベルでさまざまな新しい試みに挑戦していく内容になっています。これらの提案以外にも、今後はさらに多くの取り組みがなされなければなりません。

大阪教会管区という大阪教区を含めて名古屋、京都、広島、高松の五つの教区相互の具体的な協力関係の構築、キリスト教諸教会とのエキュメニカルな関係の広がりをつくること、諸宗教との関わり、社会の福音化につながるさまざまな動きとの関わりなど、この新生の動きの展開は果てしなく広がっています。

また、今後よりいっそう重点を置きかえる必要を感じていることを挙げてみますと、

① 司牧中心の宣教から宣教中心の司牧へ
② 子どもたちや青少年重視へ
③ 女性の使命をさらに活かす教会へ
④ 障害をもつ人たちなどさまざまなハンディキャップのある人たちとともに歩む教会へ
⑤「日本人の教会」から「国籍や民族の違いを超えて歩む日本教会」へ
⑥ 地域に存在する教会から、地域に生きる教会へ
⑦ アジアに生きる教会へ

などがあります。どれもが避けて通れない大事な課題です。

歩めば歩むほどに次々と見えてくるものがありますし、歩みを支えてくださる恵みもさらに与えられ強められるように感じます。以下の第三部を今後の改革の叩き台として、それぞれの共同体で分かち合いのうちに読み進めてくださることを願います。

阪神淡路大震災以来、私たち大阪教区の教会は福音的な価値観を具体的に生きようと決意してこの 3 年半を過ごしてきました。主の霊に導かれている実感とともに、多くの難しさも抱えています。しかし、すでに鋤に手をかけたのですから（ルカ 9 章 62 節）、ここで後ろを振り向くわけにはいきません。日本の教会を担う私たちは、明治時代以来の宣教師に育てられた幼児期、1950～60 年代以降の邦人の司祭や修道者がようやく増えて自立し始めた青年期を過ぎ、今こそ 21 世紀を生きる大人の教会の時代に入っていかねばなりません。私たちが目指す教会は、「熱くも冷たくもなく、なまぬるい」（黙示録 3 章 16 節）ものではなく、「固い食物の代わりに、乳を必要」（ヘブライ 5 章 12 節）とし、いつまでも「初歩を教えて」もらう「幼子」の段階から、「固い食物」を食べ「善悪を見分ける感覚を経験によって訓練された、一人前の大人」の段階へと進んで行き、「キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身をもって満た」（コロサイ 1 章 24 節）すことが出来るような教会になっていきたいと希望します。

イエスを通し、聖霊によって語られる御父のみ旨は、私たちの「新生」の教会が「新しい福音宣教」に向かって進んでいくために、多様性を豊かに育てつつ「神の国」の実現に一致して取り組む教会となることを促しておられ、そのための大きな恵みを与えて下さっているように思います。聖母マリアの模

範にならい、「お言葉どおり、この身に成りますように」（ルカ 1 章 38 節）と、み旨を受けとめて歩んで行かれますように祈ります。